

Key Word : プリパレーション、ビデオ、腎生検

## I. はじめに

近年、医療を受ける子どもの基本的人権擁護の視点から、検査や処置等をうける子どもに対するプリパレーションが実践されるようになった。筆者らも何が起るかを子どもがイメージできることを目的に、資料やデモンストレーションを組み合わせた介入方法を試みている。しかし、概してその方法は、断片的な情報に過ぎないためか、「たぶん大丈夫」「何が分からないか分からない」という結果に終わることが多かった。そこで、今回、子どもにとって身体侵襲が大きく、不安や恐怖を伴う腎生検に焦点をあて、検査の時間的流れと実際に何が起るかをイメージできるビデオを作成した。そして、そのビデオを用いて、腎生検を受ける子どもと両親に対してプリパレーションを行った。また、腎生検を受ける子どもの多くは学校検尿で異常があり、受診の結果、腎疾患を指摘された学童期や思春期の子どもである。そのため対象を学童期の子どもとした。本研究は、ビデオを用いたプリパレーションの効果を評価することを目的に取り組んだので、結果を報告する。

## II. 研究方法

### 1. 研究参加者

治療方針の決定のために M 病院に入院中のアレルギー性紫斑病の 7 歳男児と両親

### 2. 研究方法

- 1) 腎生検(以下検査)のビデオを作成する
- 2) 子どもと両親を対象にプリパレーションを実施する
- 3) データ収集は、ビデオ視聴前・視聴中・検査前・検査中・検査後の子どもと両親の反応の観察及び半構成インタビューによる
- 4) プリパレーションの効果の評価視点
  - ①何がおこるかを子どもがわかる方法であったか
  - ②子どもが感じる不安や恐怖感を予防・緩和できたか
  - ③子どもが頑張ったと実感できたか

### 3. 用語の定義

プリパレーション：病院で子どもが“きつ

と直面するだろう”と思われる医療行為によって引き起こされる様々な心理的混乱に対し、説明や配慮をすることにより、その悪影響が最小限になるように工夫しその子なりに乗り越えていけるように子どもの対処能力を引き出すような関わりをすること

### 4. 倫理的配慮

両親・患児に本研究の目的、参加の自由、断っても不利益を被らないこと、守秘義務、データは研究目的以外に使用しないこと、個人が特定されないように配慮することを口頭と文書で説明し同意を得た。

## III. 結果

### 1. ビデオ作成

作製したビデオの内容は、子どもが体験することに焦点をあて『検査当日の朝から翌日まで』を小学生男児をモデルとして、実際に検査を行う部屋で同じ物品を用いて撮影を行い、注意点や補足説明を字幕とナレーションで行った。全 15 分。

### 2. プリパレーションの実際と子どもと両親の反応

#### 1) ビデオ視聴前

##### 《両親の示した反応》

主治医より両親に検査説明が行われ、父親は「おまかせするしかないと思っています」と落ち着いていたが、母親は「説明を聞いても悪い事ばかり。必要なことは解るが、この子にはまだ言わないで下さい」と混乱している様子だった。その理由を聞いたところ「針を刺して検査を行うと言われたが、イメージがわからなかった。本人に説明をしないといけないと思っていたが、私自身よく分らない。私があやふやなことを言うよりは看護師さんたちがちゃんと説明してくれた方が良い」と親自身の準備不足があった。そのため、ビデオを使用しプリパレーションを行い、両親と共に子どもを支えていきたいことや、検査を乗り越えることで子どもの成長につなげていきたいことを伝え、同意を得た。

##### 《子どもの示した反応》

父親より検査があることを伝えられ、検査のビデオを見たいか意思確認が行われた。

「見たい」と興味を示した。

## 2) ビデオ視聴中

### 《両親の示した反応》

服装や部屋の状況、「どれくらいの痛みかは分らないですね」などの質問があり、その都度ビデオの映像を使用しながら質問や注意点について補足説明を行った。痛みに関しては個人差があり、ビデオでは伝えることに限界があるが、確認をしながら疼痛コントロールをしていくことを説明した。子どもへの説明方法や検査に際しての希望があり、希望に沿う旨を伝えた。その後子どもとビデオを見る際、父親は子どもに対して「右はどっちだ」「足は動かしたらいかんとぞ」など補足説明を行っていた。

### 《子どもの示した反応》

静かにビデオを見ており、父親の説明にうなずいたり、笑ったりしていた。視聴直後はビデオの感想を聞くと「手術みたいなものと思っていたから残念。やってみたかった。」と笑いながら話していた。

## 3) ビデオ視聴後から検査前

### 《両親の示した反応》

「テレビでよくある手術のようなものを想像していたので、それよりも楽そうなので安心した」という感想があった。デモストや、どれ位覚えているか確認作業をする際、注意を促したり、子どもの反応を見て励ましたりしていた。

### 《子どもの示した反応》

デモスト時、「寝ながら食べていた」などビデオの内容を覚えており、その通りに行う事ができた。検査に関する一連の流れは記憶があやふやであったため、再度ビデオを見ながら説明を行った。検査前の流れや検査中・後の注意点は覚えており、何故そうするのか、どのように行動するか等の質問に対して正しく答えた。母親より児の反応として「検査の事については、ドキドキするといっていたけど、検査自体については安心したみたいです。痛かったら言っているの？って言っていたので、痛いのは自分にしか分からないからちゃんと言いなさいって言いました。」との情報があった。検査当日には「次は何をする」と検査の流れを自ら言ってきた。

## 4) 検査中

### 《子どもの反応》

検査中は鎮静薬の効果で傾眠傾向だったが、声かけへの反応はあり、声かけを行い励ま

しながら行った。動いたり泣いたりすることは無く、息を止めるなどの指示に従って行えた。

## 5) 検査後

### 《両親の反応》

検査後頑張ったことを褒め、子どもの訴えに対し励ましたり、注意を促したりしていた。また、長時間の同一体位が取れるように、娯楽の提供を行い子どものストレス軽減を図っていた。ビデオでの説明について、母親の意見としては「(主治医の検査説明だけでは)想像がつかなかったが、ビデオを見たことで変な心配をしなくてよくなった。スムーズにできたと思う。ビデオなら、目で見て流れが分かって解りやすかった。見たことはとてもよく、他の患者さんにも使っていたほうがいいと思う。」というものだった。

### 《子どもの反応》

検査直後は両親の顔を見て泣いていたが、足を動かさないなどの注意点は守れていた。その後もふざけて足を動かすような素振りを見せることはあったが、実際には動かすことなく、後出血なく経過した。ビデオでの説明について、患児の意見としては「検査はビデオで見たことと同じだった。(腰の)注射は痛かった。」とのことで、ビデオを見たことで心の準備を行う事が出来たかの問いに、うなずいていた。検査後約一ヶ月が経過し、母親の話より「周りから褒められて嬉しかったみたいです。あの後点滴や苦い薬も、文句は言うけどしたくないとは言いませんでした。内緒なんですけど炭酸を飲みたがったことがあって、飲む？って聞いたらいらなくて。駄目なものは駄目って思っているみたいです。治る為に頑張ろうと励ましていたので、検査は目的があったのだから、うまくいったのだと思います。」ということだった。

## IV. 考察

1 「何がおこるかを子どもがわかる方法であったか」について

ビデオ内容は子どもが体験することに焦点をあて、出来るだけ実際と同じ状況になるよう表現した。また、学童期の子どもをモデルにし、違和感無く自己投影できるように工夫した。その結果、ビデオ視聴後のデモストでは、ビデオ通りに練習を行うことができた。注意点も理解し行動化できた。この結果は、K. ギネが「概念は感覚

的経験を通して形成され、目と耳に訴える視聴覚教材が適切に活用され分析されると、それらの知識や情報は鮮明に記憶され、新しいより複雑な概念を形成したり明確化するうえで役立つ」というように、プリパレーションの媒体としてビデオという視聴覚教材を用いたことが有効に働いたことによると考えられる。

また、学童期の認知発達には、目で見たり具体的に体験しなければ、言葉だけでは理解できにくい段階にある。しかし、与えられた情報からわかる範囲で論理的に考えることができる。その意味で、子どもが体験することに焦点をあて時間的経過と注意点を具体的に動画としてまとめた内容は、子ども自身が検査について事実を認識する助けになったと考える。また、ビデオは繰り返し視聴したり、途中で止めて補足説明をすることができるため、子どもの理解に応じた使い方ができた。更に、動きのある画像で視聴覚に訴えるビデオは臨場感があり、他の教材では伝える事ができない雰囲気や実際の場面を表現することができる。これらの理由より子どもが理解し、イメージすることを容易にしたと考える。

ビデオの限界として、痛みの感覚などを伝えることの困難さがある。子どもの経験してきたことを使いながら、補足説明を行う事や、不安因子を除去するような説明など、医療者の関わりが重要となるであろう。

2. 「子どもが感じる不安や恐怖感を予防・緩和できたか」について

ビデオ視聴前の検査のイメージは『テレビで見る手術のようなもの(麻酔と言われて連想したとのこと)』と捉えており、『よく分からない』という漠然としたものであった。ビデオを視聴することにより、子どもはドキドキした気持ちを抱えながらも安心感を持ち、一方で『痛み』について両親に相談するという行動が見られた。検査中も、問題なく終了することができた。この反応から、子どもが自分に何が起るかをイメージし、心の準備を行うことができたといえる。

効果的なプリパレーションのあり方として、親が看護師と相談できる場を持つ必要性が報告されているが、今回、子どもに先立ち、両親にビデオを視聴してもらい、親の不安や疑問に対処したうえで、両親と医療者が共に子どもの支援方法を検討しな

がら支援をおこなったことも、子どもの不安や恐怖感を予防することにつながったと考える。

3. 子どもが頑張ったと実感できたか

母親とは、今回のことを乗り越えることにより子どもが成長できたなら良いですね、ということをお話していた。検査中、検査後と子どもの頑張りを認める関わりを、両親、医療者ともに行った。母親より、褒められた事で子どもが嬉しそうだったこと、検査後は自らコンプライアンス行動を取り、我慢しながらも、頑張って治療に臨んでいる子どもの状態について知った。

頑張った自分を他者、特に重要他者である両親から認められることは自己効力感を高めるといわれる。また、エリクソン発達理論において、学童期の発達課題は『勤勉性対劣等感』であり、頑張ることでの成功体験により、発達課題と危機を乗り越え人格的発達を遂げるといわれている。身体侵襲の大きい検査を受けることは、子どもにとっては一見マイナスと思える状況であっても、それを子どもの成長の契機になるように看護介入することは非常に重要であり、プリパレーションはそのための有効な手段となり得ると考える。

## V. 結論

腎生検を受ける学童期の男児に対して、ビデオを用いてプリパレーションを行ったことは、子ども、両親が検査の実際を具体的にイメージでき、子どもの適応や頑張りを支えることに有効であった。しかしビデオには限界があり、限界を知った上で援助方法を考えていくことが必要となる。

## VI. 終わりに

今回は一症例であり、今後多数の症例に適用し、子ども、両親の様々な反応を捉え、より良いプリパレーションにつなげていきたい。

## 引用・参考文献

1. 蛭名美智子：子どもと親へのプリパレーションの実践普及～医療行為を行う際の子どもへの関わりについて～. 平成 14・15 年度厚生労働省科学研究
2. 高橋清子他：日本の小児看護におけるプリパレーションに関する文献検討. 日本小児看護学会誌, Vol.13, No.1, pp83-91
3. 佐藤美津子他：看護教育における授業設計 医学書院
4. 小沢 道子：小児看護学 金原出版